

KOKUGAKUIN ZASSHI

THE JOURNAL OF KOKUGAKUIN UNIVERSITY

Volume CV June 2004 Number 6

Theses

- A proposal regarding the revision of the Organ Transplant Law.....AWATA Yoshihiko 1
- The formation process of 'mashti' and conjunctive particle 'wo' and 'monowo' in ancient Japanese.....AONO Jun'ya 17

School libraries and resource centres in France:

- BCD and CDI.....SUNAGA Kazuyuki (1)

Discussion hall

- The writing system of ancient Japan, or of ancient Japanese?.....TOLLINI, Aldo 30

Note

- The return to power of the Motooris in Matsusaka —the 61st anniversary exhibition of Norinaga's works of his death.....NAKAZAWA Nobuhiro 32

Book review

- "Shakuchōkū · Orikuchi Shinobu ron (Essay on Shakuchōkū · Shinobu Orikuchi)," by Zenji Narahashi.....MOCHIDA Nobuko 52

KOKUGAKUIN UNIVERSITY

Shibuya Tokyo Japan

國學院雜誌第一〇五卷第六号 (通卷一一六六号)

國學院大學

平成十六年六月十五日発行(毎月一回十五日発行)
第一〇五卷第六号 (通卷一一六六号)
昭和五十一年八月五日第三種郵便物認可

臓器移植法の改正に関する一提言.....栗田義彦	1
助動詞「まし」の成立が誘発した接続助詞「を・ものを」青野順也	17
フランスの学校図書館: BCDとCDI.....須永和之(1)	
【談話室】 「古代日本の表記」か「古代日本語の表記」かをめぐってアルド・トリニ	30
【研究ノート】 松本居家の復権 —官長歿後六十二年目の遺墨展—.....中澤伸弘	32
【書評】 奈良橋善司著『帆迫空 折口信夫論』.....持田叙子	52

國學院雜誌

平成十六年
六月

「古代日本の表記」か 「古代日本語の表記」かをめぐって アルド・トリニ

「古代日本の表記」を研究することは、私にとってどのような意味があるのかについて考えてみたい。まず、研究のテーマを「古代日本の表記」にするか、「古代日本語の表記」にするか迷うところである。「語」を入れるか、入れないかによりかなり意味が違って来るからである。奈良時代まで日本列島に住んでいた人々は、大陸から入ってきたテキストに基づき、文字を使ってどのように、また何を書き表したのか。これを「日本語の表記」と言えるのか。その時代の音声言語は日本語なのか。「古事記」や最近数多く出土された木簡など、奈良時代までの文献は、どのようなコトバで、つまり、どのような語法で書かれているのか、「自土」の言葉なのか、漢文なのか。

「表記」と「文字言語」は「言語」と「音声言語」とどう関係するのか。「文字言語」とは「音声言語」を文字化したものだという考え方が、アルファベット圏の学者の間では一般的であるが、事実そうなのか。古代日本で書かれたテキストを見れば、疑問に思ふのは当然である。古代の日本人は、テキストを著すときに、どのような言語を念頭に入れて書いたのか。テキストのシンタクスは音声言語と一致するのか異なる言語なのか。もし別の言語であったなら、文字テキストの言語は何であったのか。「自土」の言葉か、漢文か、もしくはこの二つの混交文か。自立言語なのか、特殊なシンタクスを持つ言語なのか。どの言語かを決める手がかりの一つは、「読み」であるが、この「読み」とはいつたい何を表すのか。文字テキストを音声テキストにするプロセスの「読み」なのか、また、音声にしなくても理解できる場合も「読み」と言えるのか。「読み」の定義も表音文字と表語文字とは違って来る。古代日本のテキストからはこのような

疑問がわいてくる。

言語と表記の関係、音声言語と表記の関係、「読み」の意味、テキスト言語などについて理解するためには、アルファベット文字の研究だけでは不十分である。古代日本語は非常に複雑ではあるが、上記の点を研究する上では一番適したケースではないだろうか。古代日本のテキストは、言語学の分野における表記とその周辺の研究に貢献できるのではないだろうか。

「書く」ということは、必ずしも既存の音声言語を文字化するプロセスとは言えない。多くの古代日本のテキストに使われている言語はどこにもないのである。「書く」ことは創造的なプロセスでもあり、書きながら新しい言語を創り出すことも可能である。このように考えると、大陸から入ってきた中国語の文字を自用に使うとき、必然的に二つの選択があった。一つは、中国語の文字を原語とは全くかけ離れた文字として使う。もう一つは中国語の文字をそのまま使用する。前者は漢字を音字文字、つまり仮名として使い、音声言語を書き記すことである。例えば、口承の歌など、自土の言葉をそのまま記す。後者は漢文でもない、自土の言葉でもない、混交言語というか、新しい言語というか、その当時まで存在していなかった言語を創り出すことであり、これは文字言語としての日本語と呼べるだろう。この日本語は、漢文の訓読から発見、発明された言葉だという見方が最近広まって来た。この新しい言語の利点は、中国語でも自土の言葉でもデコードでき、簡単な訓読のルールさえ習得すれば、アジア大陸の共通語であった中国語と自分の言葉で通じたことである。これは律令国家の下、新政権造りに取り組んでいた日本にとっては大きな利点であった。標準化されていない用字法は、誤解が生じるが、標準化したモデルに従えば曖昧さは避けられる。日本人の書いた多くのテキストが、「似せ漢文」(和化漢文)であるのは、その時代の唯一の文字言語のモデルが漢文だったからである。

(国語学)